

## 武蔵野日曜集会

## 天来の人

## ――ヨハネ伝第3章22～36節――

1994年5月15日

小池辰雄

天来の人 十字架の土台に聖霊がやってくる ゼロ＝無限大 キリストの中に入りなさいということ キリストと一緒に行動

## 【ヨハネ3・22～36】

22 この後イエス、弟子たちとユダヤの地にゆき、其処にともに留りてバプテスマを施し給う。23 ヨハネもサリムに近きアイノンにてバプテスマを施したり、其処に水おおくある故なり。人々つどい来りてバプテスマを受く。24 ヨハネは未だ獄に入れられざりしなり。25 ここにヨハネの弟子たちと一人のユダヤ人との間に、潔につきて論起こりたれば、26 彼らヨハネの許に來りて言う『ラビ、視よ、汝とともにヨルダンの彼方にありし者、なんじが証せし者、バプテスマを施し、人みなその許に往くなり』27 ヨハネ答えて言う『人は天より与えられずば、何をも受くること能わず。28 「我はキリストにあらず」唯「その前に遣されたる者なり」と我が言いしことに就きて証する者は、汝らなり。29 新婦をもつ者は新郎なり、新郎の友は、立ちて新郎の声をきくとき、大いに喜ぶ、この我が歡喜いま満ちたり。30 彼は必ず盛んになり、我は衰うべし』

31 上より来るものは凡ての物の上にあり、地より出づるものは地の者にし  
て、その語ることも地のことなり。天より来るものは凡ての物の上にあり。  
32 彼その見しところ、聞きしところを証したもうに、誰もその証を受けず。  
33 その証を受くる者は、印して神を真なりとす。34 神の遣し給いし者は神の  
言をかたる、神、御霊を賜いて量りなければなり。35 父は御子を愛し、万物  
をその手に委ね給えり。36 御子を信する者は永遠の生命をもち、御子に従わ  
ぬ者は生命を見ず、反つて神の怒その上に止るなり。

## ●天来の人

22 この後イエス、弟子たちとユダヤの地にゆき、其処にともに留りてバプテスマを施し給う。



特に弟子たちです。キリストに選ばれたわけです。もちろんキリストのバプテスマは御霊のバプテスマです。水に浸してもそういうことです。

<sup>23</sup>ヨハネもサリムに近きアイノンにてバプテスマを施したり、其処に水をおくある故なり。人々つどい来りてバプテスマを受く。

もちろん、洗礼のヨハネです。キリストの先駆者です。「エルサレム」の「サレム」がこの「サリム」で、「泉」という意味です。「エール」というのは「神さま」のことで、「エルサレム」とは「神さまの泉」という字です。しかし、この「サリム」というのはいつくもある。非常にそこは水の豊かな所で、多分七つ位の泉があつたそうです。

<sup>24</sup>ヨハネは未だ獄ひとやに入れられざりしなり。<sup>25</sup>ここにヨハネの弟子たちと一人のユダヤ人との間に、潔きよめにつきて論起ろんぎこりたれば、<sup>26</sup>彼らヨハネの許に來りて言う『ラビ、視よ、汝とともにヨルダンの彼方にありし者、なんじが証せし者、バプテスマを施し、人みなその許に往くなり』<sup>27</sup>ヨハネ答えて言う『人は天より与えられずば、何をも受くること能わず。<sup>28</sup>「我はキリストにあらず」唯「その前に遣されたる者なり」と我が言いしことに就きて証する者は、汝らなり。

「何を議論しているか」と、はつきり言つてやつたわけです。

「人は天より与えられずば、何をも受くること能わず」

とある。今日の題に「天来の人」と書きました。もちろん、キリストのことです。靈界に靈的な存在として在つたキリストが、地界にイエスとして顕れた。「肉をとつた」とヨハネ伝に書いてあるのはそのことです。肉体となつたということ。

「言は肉体となりて我らの中に宿りたまえり、

というのがそのことです。

我らその栄光を見たり、実に父の独子の栄光にして恩恵めぐみと真理まことにて満てり。」

(ヨハネ1・14)

短いけれども、非常に内容の深いことを言っているわけです。

「太初はじめに言あり、言は神と偕ともにあり、言は神なりき。」(ヨハネ1・1)

という、この「言」という訳は本当はあまりあわない。かえつて、

「太初はじめにロゴスあり」

と、もともとのギリシア語で言つた方がいい。「ロゴス」という言葉がただ「言」という日本語になつたのでは、内容が非常に平べつたくなつてしまふ。本当は「言霊」あるいは「霊言」です。

「太初はじめに言霊ことだまあり」

とでも言つた方がいい。

「<sup>16</sup>我らは皆その充ち満ちたる中より受けて、恩恵めぐみに恩恵を加えらる。<sup>17</sup>律法



はモーセによりて与えられ、恩恵と真理とはイエス・キリストによりて来れるなり。<sup>18</sup> 未だ神を見し者なし、ただ父の懷裡にいます独子の神のみ之を顕し給えり。」(ヨハネ1・16～18)

### ●新郎と新婦

キリストを指し示したのはこの洗礼のヨハネだ。だから、洗礼のヨハネは最後の預言者です。

<sup>29</sup> 新婦をもつ者は新郎なり、新郎の友は、立ちて新郎の声をきくとき、大いに喜ぶ、この我が歡喜いま満ちたり。<sup>30</sup> 彼は必ず盛んになり、我は衰うべし』  
自分の影はもう薄くなるという。「新郎」とはもちろんキリストのことです。この「新婦」というのは、自分もそうだし、他の一般の人達もみなそうだ。要するに大きく言えば、人類です。エクレシア、教会が「新婦」です。「エクレシア」というのは、

「呼び出され集められたるもの」

という意味です。「教会」という訳は本当はおかしいんだ。我々はみなエクレシア、キリストの花嫁といわれる、その一人一人であるわけです。イスラエルの民は神さまの妻である。神さまは、エホバは夫である。そういう夫妻の關係が旧約にあるので、それが新約にもこうやって延長しているわけです。そのことを旧約ではつきり言っているのはホセア書です。エレミヤも言ってるはずです。

「<sup>19</sup> われ汝をめとりて永遠にいたらん、公義と公平と寵愛と憐憫とをもてなんじを娶り、<sup>20</sup> かわることなき真実(信実)をもて汝をめとるべし、汝エホバをしらん。」(ホセア2・19～20)

本当にエホバの神さまが分かる。「知る」というのは頭ではない。全存在でわかることがこの「知る」という意味です。ヘブライ語の「知る」というのは深い意味をもっている。

「アダム、エバを知る」

とある。アダム・エバの交わりのことも「知る」という。ホセア書2章20節は大事な節です。

「かわることなき真実をもて」

の「真実」はうまくない。「真」よりも「信」を書いた方がいい。「信実」です。「真実」は心が偽りのないことだが、「信実」は相手を裏切らないことです。相手があつて、そういうまことを尽くすのはこの「信実」なんです。

「かわることなき信実をもて」

とは、

「絶対に裏切らないぞ」

ということですよ。

「<sup>21</sup> エホバいい給う、その日われ応えん、我は天にこたえ、天は地にこたえ、



22 地は穀物と酒と油に応えまた是等のものはエズレルに応えん。23 我わがためにかれを地にまき、憐れまれざりし者をあわれみ、わが民ならざりし者にむかいて汝はわが民なりといわん。かれらは我にむかいて汝はわが神なりといわん。」(ホセア2・21～23)

素晴らしいね、ここところは。相応ずることで、みなこれは裏切らない世界です。神と民との関係は、夫と妻との関係のように深い愛の関係だということ。それが本当の信実ということ。聖書の言葉は、哲学と違って、非常に表現が文学的です。私の先生の藤井武先生は、こちらの「真実」を非常に言っておられたけれども、やはりあの頃の信仰は、人間の心の真実というまことさ、そういうことを問題としていた。そういう真実は苦しい。「あの人は真実でない。いい加減だ。ウソパッチだ」なんて、人をすぐ批判するようなことになる。これは無、我れ無き世界の方がいい。そうすると、この「信実」が本ものになる。これは無我、我が無いのだから、裏切らない。

### ●十字架の土台に聖霊がやってくる

ヨハネ伝にもどります。

29 新婦をもつ者は新郎なり、新郎の友は、立ちて新郎の声をきくとき、大いに喜ぶ、この我が喜びま満ちたり。30 彼は必ず盛んになり、我は衰うべし』  
「キリストをちゃんとこうやって指し示して、皆がこれを受けとれば、私はどうでもいいんだ」

と。「我は衰う」とは妙な言い方をしますけれども。

「もう自分の使命はこれで果たしたんだ」

というわけです。

31 上より来るものは凡ての物の上にあり、地より出づるものは地の者にして、その語ること地のことなり。天より来るものは凡ての物の上にあり。32 彼のの見しところ、聞きしところを証したもうに、誰もその証を受けず。33 その証を受ける者は、印して神を真なりとす。

キリストは神を示しているひとだ、神さまの outlet、現象体だから。

34 神の遣し給いし者は神の言をかたる、神、御霊を賜いて量りなければなり。

この34節が大事です。キリストは神さまの聖霊のひとで、これは無量だ、量られない大変な内容だと。

私たちが十字架で贖われて、十字架の土台に聖霊がやってくる。十字架の土台のない聖霊はダメです。十字架で完全に贖われたら、その無の世界に聖霊が入ってくる。十字架で贖われているということは無我を賜っているということです。我々の存在は賜りたる存在なんです。我が無い——無我者、私の無き者——それで私は「無者」と言っている。いわ





ゆる自己主張をしているのではない。無者は神・キリスト主張なんです。神・キリストを告白している。

「聖書研究会」なんて、いくら研究したってダメだ。研究なんかしていると段々本当の世界から遠ざかってしまう。身体で読む。身体で読まなくてはいいかん。研究ではない。研究というと頭の問題になってしまう。研究会というのはみな頭の仕事なんだ。ゲーテの『ファウスト』だってそうです。『ファウスト』の研究会をやったってダメなんです。やはり、作者ゲーテの心の中に本当に入らなければ。ゲーテでもダンテでも一流の作品はそうです。ユゴーの『レ・ミゼラブル』でも、ブラウニングの詩でも、トルストイでも。漱石さんはまだ心の世界だ、本当の霊の世界まで行っていない。惜しいね、素晴らしい文学なんだけれども。日本に偉大な文学がないのはそういうわけです。本当の宗教をもたなければ、偉大な作品はできてこないことはゲーテも言っている。ゲーテは聖書が彼の中に溶けてしまっているから註解なんてことは絶対にしない。

とにかく、聖書というのはそういう凄い本です。神さまの、上から来ている言だから。聖書を読んでいて楽しくなかったらダメですよ。楽しくてしょうがない、力がきてしょうがない、光が来てしょうがない。運命環境がどうなったって、そんなことは関係ない。聖書は本当の現実を、天的な現実を与えてくれる。

### ●ゼロ＝無限大

<sup>33</sup>その証を受くる者は、印して神を真なりとす。  
「神さまは本ものだ」と。

<sup>34</sup>神の遣し給いし者は神の言をかたる、神、御霊を賜いて量りなければなり。  
キリストは全くそうなんです。遣わされている者です。

「自分は何もできない、何も言えない」  
と彼自身がヨハネ伝で言っているのだから。ヨハネ伝5章、

「<sup>19</sup>イエス答えて言い給う『まことに誠に汝らに告ぐ、子は父のなし給うことを見て行うほかは自ら何事をも為し得ず、父のなし給うことは子もまた同じく為すなり。』」

とある。

「自分は何もできないんだ。みんな父なる神さまのやることをさせられているだけだ。同じことをしているんだ」

と。

<sup>20</sup>父は子を愛してその為す所をことごとく子に示したもう。また更に大なる業を示し給わん、汝等をして怪しましめん為なり。

「全部、私は神さまから示されているんだ」と。



22 父は誰をも審き給わず、審判をさえみな子に委ね給えり。23 これ凡ての人の父を敬うごとくに子を敬わん為なり。子を敬わぬ者は之を遣わし給いし父をも敬わぬなり。

けれども、本当の審判は実は我々自身が自分をさばいている。キリストは審くのではない、救わんとしやうて来たのだから。

24 誠にまことに汝らに告ぐ、わが言をききて我を遣し給いし者を信する人は、永遠の生命をもち、かつ審判に至らず、死より生命に移れるなり。

「私を受けとる者は永遠の生命をもち、かつ審判に至らず、死より生命に移つてい

る」  
と、ちゃんと書いてある。また、30節に、

30 我みずから何事をもなし能わず、ただ聞くままに審くなり。わが審きは正し、それは我が意を求めずして、我を遣し給いし者の御意を求むるに因る。」(ヨ

ハネ5・19:30)

「我みずから何事をもなし能わず」

と、はつきり言っている。無能者、無言者です。神さまを100%に受けとるから、限らない力がくるし、限りなく言があらわれてくるし、それだけの話だと。だから、キリストは無者なんです。私が無者と言っているのはそのことなんです。

「ゼロ＝無限大」(0＝∞)

ということ。我々もその角度でキリストを受けとつていけばいい。

「無という境地になかなか悟れません」

なんて、普通は禅宗になつたらそうだ。禅宗は坐禅して、無の境地を悟り得るわけだ。ご苦労さんな話なんだ。ところが、福音の世界は、無は賜りたる無なんです。我々はでたためでしょうがない。躓いたり転んだりしている。ところが、

「そんな心配は要らない。私はお前のそういうものを全部、十字架で受けとつたら、心配するな。お前に本当の無我をやるぞ」

と言つてくださる。私は「ありがとうございます」

と言つて、その無我を無条件に受けとる。人間の構造というのはいくつという二重構造になっている。しょうがない者が、実はそのしょうがないものの奥にはつきりとした無の現実をいただいている。ここに聖霊が入ってくる。この無は十字架で頂いたのだから。十字架で頂いたところに聖霊が入ってくる。だから、私は

「十字架と聖霊は分けてはダメです」

と言っている。



## ●キリストの中に入りなさいということ

キリスト教ではない。キリスト道です。教えではなく、道なんです。大体、日本人は道の民なんだ。茶道、華道、弓道、柔道、剣道という。術ではなく、道なんです。道というのは、自分の足で本当に歩いて体現していく世界です。自分の足で歩かなければ道にならない。一人一人がちゃんと自分で道を開拓していくわけです。一人一人によってみな道がちがう。天道を我々は地路として歩くわけです。天道と地路が相即するわけです。一人一人は路なんです。各々の足で歩くのが路です。その路がこの天道に即さなければいかん。質的に即す、即如です。

なんののかんの言っても、キリストの中に入らなければダメです。

「キリストは救主だ」  
すくいぬし

なんて、ただ頭や心で思っただけでダメだ、思う世界ではない。キリストの中に入って、キリストと一つになりなさい。キリストと一つにならなければ、「救い」なんて言っただけ、そんなものは救いでも何でもない。

「十字架で贖ってくださいました」

なんていうお題目を信じたつてしょうがない。キリストの中に入りなさいということです。

「キリストわがうちに在り」

と、パウロがはつきり言っているではないか。あのパウロはキリストと一つになったから凄いことになった。

ローマ書8章に、

「<sup>38</sup>われ確く信ず、死も生命も、御使も、権威ある者も、今ある者も後あらん者も、力ある者も、<sup>39</sup>高きも深きも、此の他の造られたるものも、我らの主キリスト・イエスにある神の愛より、我らを離れしむるを得ざることを。」(ロマ8・38～39)

とパウロは叫んでいる。

「<sup>6</sup>肉の念は死なり。霊の念は生命なり、平安なり。<sup>7</sup>肉の念は神に逆う、それは神の律法に服わず、否したがうこと能わず。<sup>8</sup>また肉に居る者は神を悦ばすこと能わざるなり。」(ロマ8・6～8)

「肉」とは自己本位のことです。ローマ書8章はローマ書の中心です、指輪のダイヤモンドのようなところです。パウロの書翰で一番偉大な書翰はローマ書。その一番の中心は8章です。ローマ書8章とコリント前書13章は暗記するくらいによく読まないとね。コリント前書13章は聖霊の愛のところ。愛は、愛は……」と書いてある。あの「愛」は御霊の愛、キリストの愛です。

ヨハネ3・34の、

<sup>34</sup>神の遣し給いし者は神の言をかたる、神、御霊を賜いて量りなければなり。



と。神さまはキリストには聖霊を与えて、その内容は無量だという。だから、凄い。

「聖書はカケラにすぎない。まだ、たくさん内容がある。キリストの言ったりした  
りした事の一部分にすぎないんだ」

と、ルターが言っている。天来のキリストだけれども、キリストは――もし神さまとの交わりを止めたら、イエス自身がどうにもならない――しょっちゅう神の光を浴びて、神の生命を生命としている。神さまは見えないですよ、聖霊をもつて顕れる。神さまの具体的な内容は聖霊だから。御霊の神だ。信仰（信交）の世界はそういう神秘をもっている。神秘の現実です。この世界は我々の運命環境に全然支配されない。

「どうも、こうで。どうも、ああで」

なんて、人はいろいろな愚痴を言っているけれども、愚痴が要らない。この神秘の世界に入ると、

「どうにもでもなれ。私はそんなものには勝ってしまっているぞ」

と。福音の世界は、

「こうしろ、ああしろ」

なんていう律法おきての世界ではない。福ゆふの音信おとずれの内容はキリストだから、キリストと一つになるだけのなしです。キリストと一つにならなければ、いくら聖書を読んだって、いわゆる研究なんかしたってどうにもなりません。

### ●キリストと一緒に行動

私は朝4時半に起きて部屋の中で独りで祈る。時間を超越している。キリストの光や力がきてしょうがない。それが集会の準備なんです。参考書なんか何も読んでいるのではない。参考書なんか一つも要らない。聖書だけでたくさんだ。もし読むなら、信仰（信交）の偉大な先輩の伝記でも読んだ方がいい。アッシジのフランチェスコとかね。フランチェスコというのは素晴らしいひとだ。さんざん人助けをして、最後は地面に平伏して死んでいる。

「狼さん、あんたは人を喰ったりしたらダメだ。私の食物をやるから、おとなしく  
しなさい」

と言ったら、狼がフランチェスコになついでしまうんだから、大変なひとです。動物というのは本ものには感覚があるんだ、参ってしまっただね。愛する目で見ているのと、怒るような目で見ているのとは、動物はすぐ分かる。犬でもそうです。

35 父は御子を愛し、万物をその手に委ね給えり。36 御子を信ずる者は永遠の  
生命をもち、御子に従わぬ者は生命を見ず、反って神の怒いらだの上に止とどまるなり。

「信ずる」という言葉がどうも躓ずきになる。「御子を信ずる」とあるから、クリスチャンは「信仰、信仰」と言っている。「信ずる」ではなく、御子を「受けとる」でいい。私は聖書を翻訳するときには、「信ずる」なんて書かない。





「御子を受けとるものは――身受するものは、からだで受けとるものは――永遠の生命をもつ」

と訳す。「信ずる」「信仰」という言葉が一般のクリスチャンには躓きになっている。だから、観念的になる。そして、ごもつとものような顔をしている。そんなのはくたびれてしまう。皆さんは私の気合がわかるでしょ。そういう気合で聖書を読んでください。言葉になんか躓かないで、聖書の言葉の奥の世界をグーッとつかむ。

要するに、どこを読んでも、キリストと一つにならなければすべてが空しい。キリストは神さまと一つなんだ。神さま抜きキリストなんかありはしないのだから。キリスト抜きのクリスチャンなんかない。クリスチャンなんていう言葉ばかりではしょうがない。

<sup>36</sup>御子を信ずる者は永遠の生命をもち、御子に従わぬ者は生命を見ず、反つて神の怒<sup>とどま</sup>その上に止るなり。

この「従う」という言葉がまた躓きになる、

「私はなかなか従えません」

なんて。キリストと一つになれば「従う」なんてことは要らない。

「キリストと一緒に行動しますよ」

ということ。「従う」なんていうものだから二段構えになってしまう。この言葉が躓きになる。

「キリストと一緒にやりますよ」

というのが、この「従う」だ。一緒にやればいい。それが本当の「如、即、如」の現実です。「如」という字は「ごとし」という意味ではない。「それと一つになる」消息を「如」という。

いわゆる「信じ」たつてダメだよ。「信ずる」とか「信仰」という言葉が一般に躓きになっている。困つたものだ。からだで受けとる、体受する。全存在で受けとる。それでなかったら、いわゆる「信ずる」では力が来ない。くたびれてしまう。

これは聖霊の権威だから、私は何も頑張つてもいないし、力んでもいない。よく

「がんばれ、がんばれ」

と言うけれども、私はがんばるのは嫌いだよ、くたびれるから。キリストの無限の力をいただいた方がよっぽどいい。キリストは神さまの力を無限にいただいているんだから、智慧も力も生命も。十字架に架かつたつて死なないんだ。私は「甦える」という言葉は嫌いだ。本当の霊的生命が甦れただけののはなしです。

「息を吹き返して甦えつた」

なんて、冗談じゃない。本来のキリストが甦れたんだ。

あなた方は一人一人、なさる事に本当の力と創造的な力が出てくるから、楽しいです。キリストは創造の力をもっているからね。

